



## はじめて訪れた被災地での 「おはなしボランティア」

鈴木穂波

今年八月三日、「被災地の子どもへ文化を届けるプロジェクト」のおはなしボランティアとして、梅花女子大学からは、鶴野祐介教授、児童文学科卒業生の森山千代、鈴木穂波の三名が参加した。筆者にとって被災地を訪れるのは初めてのことで、不安を抱えての参加だった。

用意したプログラムは、手あそび「こどもとこどもがけんかして」、素ばなし「団子むこ」、絵本と手あそび「大阪うまいもんのだ」、絵本『ぼちぼちいこか』『すいかのたね』、新聞工作「たかしくんがお父さんとつりにいったおはなし」をアレンジしたものなどで、この中から組み合わせて行った。

一日目は、まず仙台市若林区の沖野マイス



次に訪れた宮城野区の宮城野児童館では、それぞれ自由に活動している中で十数名が集い、初めからリラックスした雰囲気だった。新聞工作のTシャツをどうしてもあと二つ！と言つて最後まで作つていた男の子は、迎えに来たお母さんに誇らしげに見せていた。

どちらの会場も子どもたちの活気にあふれていたが、職員の方のお話からは、表には見えない子どもたちの震災後の状況や心の傷みが浮かび上がった。

その後、被害の大きかった沿岸部へと車で向かった。レンタカーのカーナビに表示されているにも関わらず見当たらない郵便局や商店、震災発生時の時刻で止まったままの校舎の時計……。奪われたものの大きさを目の当たりにし、押しつぶされそうな気持ちになった。

## 亘理町の子どもたち

二日目の午前中は、仙台市の南に位置する亘理郡の亘理町中央児童センターを訪ねた。十数名の子どもたちが集まっていたが、前日までとは違う緊張感があった。特に高学年の

クール児童館に向かった。約六十人の子どもたちが列をなして入ってくる。最初はお互いかしこまっていたが、「大阪からののくらかかかると思う?」「十時間!」「ビューンってすぐ!」などとやりとりしているうちに、自然に笑顔の子どもたちと目があうようになって。「大阪うまいもんのだ」では、くすぐったそうに笑い、隣の子と肩をぶつけあいながら歌っている姿が印象的だった。新聞工作では、あちらこちらから「ねえ、これでいい?」と声があがる。人数が多いのにまずかった!と後悔したが、時すでに遅く…。大型扇風機の風に新聞紙をバサバサさせながら、汗だくになって職員の方と一緒に走り回った。結果的には、子どもたちひとりひとりと関わる事ができた。最後には、入ってきた時の静けさが嘘のように、部屋中に子どもたちのエネルギーが充満していた。

子どもたちの反応が乏しく、どうなるのだろうと不安にかられた。しかし、低学年の子どもたちが、手あそびやおはなしを笑ったりひっくり返ったりして全身でたのしむ姿に、場が和やかになっていく。そして、『すいかのたね』の表紙を見せると、無表情だった高学年の女の子が、「保育所の時、読んでもらった!」と初めて声をあげた。たのしかった思い出が甦るようにと願いながら、子どもたちと気持ちをあわせることを心がけて読んだ。

最後の新聞工作を終える頃には、いつの間にか皆打ち解けていた。一緒に片付けをしていた低学年の男の子は、「ねえねえ、そういう声、よく好きだよ」と言ってくれた。実は、私は自分の高い声が好きではない。そんな話をしたわけでもないのに、どうしてだったのだろう。やさしい語りかけに、思わず胸が詰まった。帰り際にも二人の子が駆け寄ってきて、ぎゅっと抱きしめてくれた。後で職員の方とお話したところ、自分の思いを皆の前で吐露したり、ハグをしたりといった心のケアのプログラムを体験したからでは、というこ



とだった。積極的な子どもたちの姿に、大人も刺激を受けたんです、とお話くださった。訪問後、職員の方の丁寧な案内で、被害の大きかった浜の方まで車で回った。「ここには〇〇保育所があって、向こうは…」という説明に、人々の生活の息遣いを感じ、やるせない思いがこみあげた。しかし、大人たちは懸命に子どもたちを守り、子どもたちはその笑顔で大人を元気づけている。その姿に、この困難を切り開いていくことができると予感させる力強さを感じた。

### 大きな被害のあった女川図書館へ

この日は午後から石巻市井内保育所で『研究子どもの文化』第十四号のための座談会が行われ、石巻市内に宿泊した。そして、翌五日は牡鹿郡女川町へと向かった。どちらも大きな被害があった地域で、想像を絶する光景にことばが出てこなかった。

女川町では、今年三月にオープンした「女川つながる図書館」を見学させていただいた。震災により建物が壊滅し、蔵書約四万冊が流

失したが、全国から寄贈された約二万冊の蔵書を備えた図書館が勤労青少年センター内に設置されている。限られたスペースの中でも、全ての本が手にとって！と語りかけてくるような配架や展示の工夫がなされていた。

大人向けと子ども向けの二部屋の間には、おもちゃや人形で自由に遊べるスペースもある。仮設住宅で暮らす幼い子どもと親にとつて、ほっとすることのできる場であろう。ドルハウスは、女の子だけでなく男の子にも人気があるということだった。こうして遊ぶことで子どもたちは心を開放しているのだろう、と語ってくださる職員の方の姿に、細やかに子どもの様子を見守る眼差しが感じられた。自ら被災しながらも、明るくパワーみなぎる職員の方の姿とにかく感服した。

この図書館の開館の案内には、次のように記されている。「地震と津波によって多くのものが失われました。新しい人々が亡くなりました。暖かい家も無くなりました。大事にしていた自分の持ち物も無くなりました。「こころ」もなくなりそうです。そのままにして



はいられません。なくなりそうな「こころ」を取り戻すのに必要なのは本の力です。こんな苦しくつらいときだからこそ、みんなで本を読みましよう。読書は、「愛」「勇氣」「夢」「希望」を与えてくれます。」

子どもにとって読書とは、文化とは、図書館とは、ということを原点に立ち返り考えさせられた三日間だった。私も「こころ」を大切に、これからも被災地と共に歩んでいきたい。

### これからの支援の あり方を問われる

菊地広子

梅花女子大学おはなしボランティア班とは組を別にして、子どもの文化研究所班（鈴木・元山・菊地）は、宮城県の児童館を訪れた。私は、『研究子どもの文化』十四号の取材と今後の支援活動の調査という目的もあった。被災地の具体的な状況認識は頭ではわかっていたが、身体で感じていないというのが正直なところだった。初めにそれを感じたのは、東北自動車道での数々の道路工事だった。工

▲荒浜保育所のプレハブの仮園舎

事渋滞も多く、そのため、最初の訪問地である角田市児童センターには間に合わなかった。別ルートで参加して下さった藤田浩子先生に迷惑をかけてしまい、申し訳なかった。

次の横倉児童館には、約三十人ほどの子が待っていてくれた。藤田先生と元山さんの語りやマジックに子どもたちの笑顔がこぼれた。翌日は、私たちは町立亘理保育所へと向かった。土曜日で子どもたちは約二十名と少なかった。広い園舎に園庭、環境が整った園という印象を受けた。園横には、津波で流された荒浜保育所のプレハブの仮園舎があった。二歳児まで亘理保育所の一室を使い、三歳児以上は仮園舎での保育だという。胸がつかまる思いがこみ上げてきた。子どもたちは、元気に元山さんの紙芝居とマジックを堪能した。

その後、石巻市、女川町等を周り、現在抱えている問題を伺った。ボランティアが大勢来て、日常生活にシフトしにくいというお話も伺った。子どもたちとどう関わり、サポートしていくのかという課題が浮き彫りになった。旅であった。

